# 47　近代中国における基礎医学用語の変容について

松本　秀士
東京大学 教養学部／立教大学 文学部

アヘン戦争以降の近代中国においては，来華医療宣教師等によって本格的な西洋学問の伝播が起こり，いわゆる西学東漸の流れが形成された．この流れの中では，やがて学術用語として流通させるための体系的な中国語訳の創出が，大きな課題となった．とくに，西洋の基礎医学分野に関する概念の伝播に焦点をあてれば，中国語によって概説される中で，暫定的な訳語があてがわれていった後に，学術用語としての体系化という明確な意図をもって，より適切な訳語の創出と，それらの改良が継続的に行われていった．

一方，中国においては，古くより独自の伝統医学の歴史を築いてきており，そこにおいては，西洋の自然科学とは異なる概念を形成しながら，独特の身体論が展開されてきている．来華医療宣教師等によって西洋の基礎医学の諸用語に対して中国語訳の用語が定められるにあたっては，そうした中国伝統医学を背景とした本来の漢字概念との干渉回避の意図が，次第に高まっていったことも一つの特徴である．

従来，アヘン戦争以降の近代中国に，西洋医学の一般的教養を最初に伝えたとして『全体新論』（ホブソン，1851）等に焦点があてられてきたが，そこで示された西洋の基礎医学用語に統一感はなく，あくまで暫定的な使用にとどまるものであって，著者に学術用語体系構築の明確な意図はみられない．同書に英語－中国語による対訳表等は付されず，一目して原語をたどることはできない．後に原語を示した語彙集『英華医学字釈』（ホブソン，1858）が刊行されるが，中国語訳用語確立を意図したものではなく，書名が示すように西洋の医学概念を中国語で説明することに主旨があり，訳語に統一感はない．同書の見出し語総数は 2044 で，この内，基礎医学に関する見出し語数は 827（うち 652 は解剖学に関する見出し語）にとどまる．

基礎医学分野での中国語訳用語の組織だった体系化は，当時，中国各地で活動した医療宣教師等による会合を経て，『グレイ解剖学書』を原書とする中国語訳解剖学書『全体闡微』（オスグッド，1881）の刊行によってはじめて行われ，英語－中国語による対訳表が付され，基礎医学の基幹的概念に対して，二音節での統一が図られた．この対訳表では，1733 の見出し語が示され，その全てが解剖学用語を中心とする基礎医学に関する用語である．

また，来華医療宣教師らの組織化もより明確に行われ，中国博医会が 1886 年に設立された．一方，ヨーロッパにおいては，はじめて解剖学用語の標準化が行われ，B.N.A.（1895）が刊行されたことも相まって，大規模な中国語訳用語の改訂の機運が高まる．そして『全体闡微』編訳時のアシスタントを務めた医療宣教師ホイットニーに新たな中国語訳用語策定が一任され，中国博医会から，やはり，『グレイ解剖学』を原書とする中国語訳解剖学書『体学新編』（ホイットニー，1904）が刊行された．同書にも巻末に英語－中国語による対訳表が付されており，3139 の見出し語が示され，その全てが解剖学を中心とする基礎医学に関する用語である．同書であらたに定められた中国語訳用語には，先述の漢字概念との干渉を極力避ける意図がみられ，基礎医学の基幹的概念に対して，単音節の語を定めたことが，最大の特徴である．このことは，西洋医学の新概念を明確に示しただけでなく，中国伝統医学の流れにおいても古来より，基幹となる概念が単音節の語によって構成されてきたことを反映しており，来華医療宣教師等らが時代とともに漢字語彙への造詣を深めていったことを示していよう．